
君に伝えたい一言

時呉夾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に伝えたい一言

【Nコード】

N0353G

【作者名】

時呉夾

【あらすじ】

少年は独りでした。誰のせいというわけではありません。彼がそれを望んだことだったからです。彼はどうなるのでしょうか。全ては、最後に分かるはずです。そんな一つの物語。

始まり、絶望（前書き）

この物語は、作者が中学時代に書いていた物を連載ものとして修正、加筆したものです。

見苦しい所もございますがご容赦下さい。

また、この作品は、自分の価値観で作られています。それを奪うようなコメントはご遠慮下さい。

では、どうぞお楽しみ下さい。

始まり、絶望

とある町に、一人の少年がいました。少年はいつも独りでした。仲間はずれになってしまった、というわけではなく、彼自身がそれを望んだからでした。

といっても、昔の少年は、ここまで頑なではありませんでした。友達もいて、笑ったり、冗談を言いあったりして人付き合いもよく、人望もありました。

しかし、少年が十歳になった夏休みに全てを変える出来事が起きました。

その日少年は、当時最も仲の良かった“友達”と、近くにあった山へと遊びに来ていました。

二人は、薄暗い森林の中を無邪気に走り回りました。

時は瞬く間にすぎ、時間はおやつ時となりました。

二人は、暗くなる前に帰ろうと山を下り始めたのです。

その時でした。

それが起こったのは。

踏み出した少年の足が空を蹴ったかと思うと、体が宙へと浮かび、思った時には穴の底へと背中を”ガッ”と打ちつけていました。幸いなことに少年にケガらしいケガはありませんでした。が、少

年が立っている場所は地上から三メートル程の穴の中、どうしても出ることができませんでした。

そこで少年は、“友達”の名前を呼びました。しかし、
「・・・・・・・・」

帰ってきたのは沈黙だけでした。

日は次第に傾き始め、周囲は暗くなつていきます。

何度も何度も少年は“友達”の名前を呼び続けますが、心の中に芽生えたひとつの種は少年の心を蝕んでいきました。

その種の名前は“孤独”・・・・・・・・。

夜も更けて月が明るく照らす中、少年はやってきた大人たちによって助け出されました。

少年は、大人たちの間に隠れて“あの友達”がいることに気づきました。

友達は俯いたまま微動だにしません。

少年も、声をかけることはありませんでした。

そして少年は独り離れていきました。

自ら周りから離れ、孤立していきました。

その雰囲気には話しかける素振りすら与えず、近寄ることすら躊躇わせるまでになりました。

次第に少年の周りから人影が消えていきます。

少年は、気にも留めませんでした。

始まり、絶望（後書き）

ペー
スは
分
か
り
ま
せ
ん
が
き
ち
ん
と
更
新
し
て
い
き
ま
す
。
ど
う
ぞ
こ
れ
か
ら
も
宜
し
く
お
願
い
し
ま
す
。

異変、悲劇（前書き）

遅くなりもうしわけありませんでした。

異変、悲劇

その日、少年は一緒に住むただ一人の家族である母親にホワイトデーのプレゼントを買うために街に出ていました。

今はその帰りで、ぶらぶらと町外れを散策していました。

外れなので、知り合いにあまり会わないので少年は気楽でした。

その前方に六、七歳でしょうか、女の子が子犬を抱いて歩いていました。

と、子犬が女の子の手を離れて車道へと出てしまいました。

子犬を追って女の子が車道へと飛び出す様を、少年はぼんやりと見つめていました。

しかし、その女の子が子犬を捕まえると同じくらいのときに、一台のトラックが走ってきます。

トラックは必死に速度を落とそうとしますが、その距離は次第に縮まっていきます。

少年は何も考えていませんでした。

ガードレールを乗り越えて女の子の元へと駆け寄りました。

そして、驚き少年を見上げる女の子と子犬を持ち上げると急ぎガードレールの向こう側へと運び上げました。

自分も、とガードレールへと足をかけたその時です。トラックが少年を勢いよく弾き飛ばしました。

宙を舞い、ガードレールを曲げながら地面へと叩き付けられた少年。

どこからか深紅の液体が流れ出してきて、少年の体を濡らしていきます。

そして同時に、自身の体から体温が抜き取られていく感覚を感じ取っていきます。

薄れ行く意識の中で少年は、自身の血が何も分からずにただそこに立ち尽くす女の子の白い靴を染め行く様を眺めていました。

ソシテ・・・ナニモミエナクナリマシタ・・・・・・・・。

三月十三日の出来事でした・・・・・・・・。

「ばさっ」

軽い音を立てて、少年の買った赤いセーターが、地面へと落ちました。

その色は、彼の血の色によく似ていました・・・・・・・・。

異変、悲劇（後書き）

これからテストなので更新はまた遅れてしまうと思います。

変化、前進（前書き）

今回は長いです。割と...

変化、前進

少年が目を覚ますと、横で少年が眠っているのを見つけました。

少年は、微動だにしません。

次第に少年の足を支える力が弱まっていきました。

「アブナイ!!」

叫んだ誰かに支えられて、少年の意識はまた暗くなっていききました。

少年が目を覚ますと、そこは一つの部屋でした。部屋は、普通の部屋でした。

その部屋の中に物が何も置かれておらず、部屋の内装が全て白く、そこに窓や扉が一つも無いことを除けば。

「気がついたようだね」

後ろから声がして、少年が急いで振り返るとそこには部屋とは対照的な服、見つめていると意識を飲まれてしまいそうな黒色でその身を固めた青年が立っていました。

なにかひっかかるその姿形に、少年は首をひねりました。

「貴方はいったい誰なんですか？ いや、何なんですか？」

少年は、強気の口調で言いました。その青年からは生が感じられなかったのです。

しかし、青年は口元だけ笑って言いました。

「確かにわたしは、誰という者ではないよ。んー、強いて言うならわたしは“死神”。少年の魂を次の世代に連れ逝く者だ」

「嘘だ!!!」

少年は叫びました。死神なんているはずがない、先ほど見たのだって

「夢ではないですよ。少なくともここは、ね。」

青年、否“死神”は少年が思った言葉の続きを紡ぎました。

「お前はいつもそうなんだよ。理論だけでしか物事を考えられずに、それ以外のことを全て否定しようとする。それだからみんな消えていってしまうんだ」

少年には、死神の言う言葉の意味が分かりませんでした。

家族でもない赤の他人に自分のことを批評される、それは少年に一つの苦痛を与えました。それでも、

「俺は、死んでしまったのか……」

少年は、先程の出来事を思い返しながら言いました。

あの状況から、正直生きていられるとは少年には到底思えませんでした。

「それでもあるし、そうでもないとも言えるな」

しかし返ってきた言葉は、謎掛けのような言葉でした。

「そこで、少年にはこの階段を登ってもらおう」

突然の死神からの提案に少年は呆れてしまいました。

「そんな、何突然言い出すんですか？ここには階段どころか扉や窓の一つもないじゃないで……えっ!？」

辺りを見渡した少年の目が驚きで見開かれました。

その目線の先には壁などなく、白い空間が広がっていました。

そして、ちょうど少年と死神の延長線上にこれまた白い階段が伸びていました。先はとも見えません。

「少年にはこの階段登ってってもらおう。ただし、一言も口を開いてはならない、何も口にしてはならない、それがルールだ」

死神は、そう告げました。

「何故口なんですか？」

少年は聞きました。

その顔を見て死神はフツ、と笑いました。そして続けます。

「少年は、“口は災いの元”という言葉を知っているか？知っているよな。人間は、どんなにきれいごとを言っても結局のところは自分が一番大事だ。そして、自分を守る為であるならば、平気で嘘をつこうとする。その嘘を庇うためにその人間はまた嘘をつき、そのせいでその人間はその人格そのものにうそをついていかなければいけないのだ」

「だが、そこで生み出された嘘はどうなる？そこで生まれたのがこの階段なのだ。この階段は人間の“口”という器官に反応してその全てを呑み込んでしまう。分かるか？言葉というものは、感情もあって生きているんだよ！」

「吞まれてしまった魂はどうなってしまうのですか？地獄とか言うものに」

「その存在が消えてしまうんだよ、完全にな。そして、ただ痛みだけがある世界に送られてしまふとわたしは聞いている」

「そして、少年は1つ誤解をしている。少年は、地獄を悪いものとして扱っている。・・・まあ現世では情報が行き届いていないだろうし、そこから所詮入った考えだからしょうがないと言ってしまえばそれまでかもしれない。だが、それではいけない。少年、地獄も天国も元々一つの同じ場所なのだ。それを、そこらへんの宗教が二つに無理やり作り変えてしまったのだよ。それでもなければ、我々死神がこの付近を担当しているはずが無かるうが。死神は、あくまで死者の引渡し、それが仕事だ」

そう言う死神は、少年が何か言う前にその姿を消してしまい、後には階段と少年だけが残されました。

どうしようもなくなった少年は、溜め息を心の中で呟きながら階段へと足を踏み出しました。

変化、前進（後書き）

ご意見感想良かったらお願いします。自分と糧となりますのでホント。

進むも、悲嘆（前書き）

遅くなってしまうました

進むも、悲嘆

少年は、ただひたすら階段を登り続けます。

階段は長く長く伸びて、その外では夕焼けが朱く少年を照らしていました。

そして、町並みが小さくなるほど登っていった時、階段の奥に一つの扉が設置されていました。

そのあまりの不自然さに扉を開けようとした少年の手が止まりますが、それでも心を決め、少年は扉を開きました。

扉を開けた少年が見た光景、それは少年が眠る病室でした。

それは、先程見た時と同じようにただ一人・・・ではなく、もう一人椅子に座って頂垂れていました。

少年は、その影へとおそるおそる近づいていきます。

そこでは、母親が、母親が座っていました。母親は泣いていました。

「どうして・・・どうしてこんな事に・・・。なんで・・・なんでよりによって貴方なの」

そう言いながら母親は眠りにつきました。

眠る母親をジッと見つめていました。

静かに・・・・・・・・・・静かに・・・・・・・・・・その姿を見ていました。
「カチャッ」

そんな音がして母親の後ろ側にあつた扉が開きました。

（ごめん、母さん。僕・・・もう行かなくちゃ）

そう、心の中で呟いて扉を抜けていきました。

扉は静かに閉じて、病室は闇に包まれていきました・・・。

その闇の中で何かが小刻みに動いていました。
そして、時折そこから言葉が漏れていきます。

「じ・・・ん、・・・・・・・・あ・・・ん。も・・・これ・・・か・・・
うほ・・・・・・・・かつ・・・んだ」

そう、何度も何度も呟き続けていました・・・・・・・・。。

進むも、悲嘆（後書き）

感想大歓迎です。是非お願いいたします

記憶、懐かしき日々

少年は再び、階段を登っていました。

その周囲は何もなく、眼下に小さく町並みが見える程度となっています。

しかし、今の少年にはそれへの何の思いも考え出すことが出来ませんでした。

少年の思考は皆、少年の眠りを嘆き悲しみ続けている母親に向けられていました。

自分はもう、あそこにはいないにもかかわらず、それでもいつか少年の瞳が再び開かれるのを待ち続ける母親。それを浮かべては胸が痛みました。

そんな少年の目の前に、また一つの扉が現れました。

少年は少し躊躇いながらも強くノブを回して中へと入って行きました。

その部屋には照明がまだ付いておらず、それでも大きな窓から入ってくる夕焼けによって部屋は薄紅色で色づけられていました。

そこは、自分がしょっちゅう階段を上がって起こしに行った自分の担任の居室でした。

同じアパートに住んでいるということで普段からそこへ立ち寄り、授業の準備を手伝ったり、大好きな本について話し合ったりしたものでした。

少年が担任の姿を探すと、すこししてリビングで通話中の姿を見つけることができました。

少年は、悪いと思いながらも担任の電話に耳を近づけて……
……その動きが止まりました。

『・・・う、交通事故。こんな季節なのに可哀想よね』

「まだ終わってたわけじゃないんだろ？そんな言い方は止めないか」

担任の言う言葉に棘が含まれます。そんな声に、

『ごめんなさい、でも、貴方だって・・・』

「どうせ皆もう学校にいるんだろ？僕も直ぐにそちらに向かうからちょっと待っていてくれ。詳しい話はそれからだ」

そう言っただけで担任はお気に入り紺色のジャケットを羽織って玄関へと足を進めます。

と、扉のノブに手をかけたまま突然少年の方を向き、呟きました。

「・・・気のせいか・・・」

そう言いながら家を出ていく彼の頬には、一筋の、雨なんかよりももっと塩辛く切ない滴が零れ落ちていました。

どれだけそうしていたでしょう。しばらくして少年は担任の腰にかけていたソファに頭から倒れこみました。

そして眠りについていきます。昔からしてきたように、今起こっている全てのことを忘れようとする為に・・・。

少年は夢の中にいました……。少年がまだ幼かったころの記憶。まだ少年が誰にでも明るく、笑顔があふれていた頃の記憶です。少年の家は、とても明るい家庭でした。セールス業を営みながらも家庭内での関わり合いをととても大切にしてきた父親。いつも家にいて、幼稚園へと出かけて行き、帰ってくるその様子をいつも見守ってきてくれた母親。一つ年下で、よく喧嘩をしながらもお兄ちゃんを慕って少年の後ろをトコトコついて来ていた可愛い妹。

みんなみんな笑っていました。どんな時でも、あの瞬間までは……。

その旅行前日に、少年は風邪をこじらせてしまい、外出することが出来なくなっていました。キャンセルすることはできなかった。それに伴って母親も一緒に……。

当日になり、他の家族が着々と準備を進めていく中で、少年は始終グズリ続けていました。グズる、といっても少年の場合は他の子供たちのように声をただ張り上げるようなものではありません。少年は、自分に目を向けてほしい時にこそ騒ぐことを止めてジッと相手の目を見続けるのです。家族もその行動の意味を分かっています。

それだから彼らは、少年の頭を四人で撫でて言いました。

また、一緒に行こうね

そう言つて、家族は出かけて行きました。

．．．．．そして、それが最後の言葉となつたのです．．．．．

やがて少年は目を覚ましました。担任は、未だ帰ってきていません。

今見てしまった夢から逃れるようにして少年は扉を抜けて行きました。

部屋はとても静かでした．．．．．。

たくさんのものが詰まった部屋の中で、何かが一枚の写真を見つめていました。

その写真には、眼鏡をかけた長身の男性とちっちゃい女の子を抱えた女性、そして中央で明るく笑っている男の子が写っていました。ずっと、ずっとそれを見続けていました・・・・・・。

曇天、想う人たち

少年は数々の扉をくぐり抜けて行きました。

そして、その扉の先で数々の人々と出逢い、そしてそのことが少年の心を打ちつけていました。

時は次第に過ぎて行きました。

少年が扉を開けた先はすでに朝となり、登校者で溢れている学校でした。

教室に入っていくとそこではすでに授業が始まっていました。しかし、クラス内はいつもとは大違いでとても静か・・・そして全てが暗い気持ちで包まれていました。

少年は、二つ空いたままになっている席の内、自分の席で無い方の席を選び、腰掛けました。

そして、その席から担任がおこなうその数学の授業を見ていました。

担任は、淡々と授業を進めていきます。

淡々と、静かに、冷静に授業を進め行くその姿をただ見ただけならば、担任のことを冷たい人、として見ていたかもしれません。

しかし、少年は知っていました。見ていました。

担任がああ部屋の中で溢した幾つもの雫を。

その姿を、一つの影が見ていました。

その影は、何も言うこと無くその場を立ち去って行きました。

自分自身が落としているその雲に気がつくことも無く……

次の部屋に入って少年は首をかしげます。

そこは、少年が眠る病室と似たような病室、しかし少年と違ってここは四人部屋でした。

しかし、少年はその場所に対する記憶がありませんでした。

だから、少年はその場を直ぐに離れて行きました。そこにいることに何の意味をも見出せなかったからこそ。

少年は

気づいていなかったのです。

柱の陰にいる

一つの影に

少年の声を呟きながら

すすり泣くその姿に

少年は気づかなかったのです。

日差し、哀しみと苦しみ

その次の部屋も、少年の知らない場所でした。

そこは、とある民家の一室。そこに、明るく笑う女の子とその母親らしき女性がいました。

女の子は首をかしげながら女性に向かって問いかけます。

「ねえねえおかーさん、あのお兄ちゃんのところわたし会いに行ったら、いつしよにあそんでくれるとおもっ???」

その女性は困ったような笑みを浮かべて言いました。

「そうね・・・時間がうまく重なるようであつたらね・・・」

「ええ、はやくお兄ちゃんとあそびたいよ」

「・・・そうね。でも、公ちゃんはお兄ちゃんに迷惑なんてかけたくなんかないでしょう?・・・でしょ? だったら素直に待つてなくちゃね」

「うん!! ああ早くお兄ちゃんに会いたいな、たつのしみだな」

女の子は、またニッコリと笑って言いました。

少年は、もう耐えられませんでした。

この女の子が自分の元を訪れることによって、この明るい笑顔が失われてしまう。

その可能性が、少年の頭の中を渦巻きました。

確かに今は“死”ということについて、女の子は理解することが出来ないでしょう。

・・・少年のように・・・。

しかし、一旦それを理解してしまった時、信じていた全ての思いが消えて行ってしまうのです。

・・・少年のように・・・。

少年は

その部屋から出て行きました。

逃げるように

聞こえないように

それでも

女の子の笑い声はずっと耳にこびりついて

離れることはありませんでした。

俄、変わった思い

フラフラになりながらも階段を登っていくと、あの死神が扉の前へと立っていました。

「ここまで無事・・・とまではいかないが、辿り着いたようだね」

死神はそう言いました。

「この扉が、最後の扉。この扉の先の門をくぐれば、全てが終わる」

「そして、わたしはその扉を開く者」

そう言っただけで死神が手をかざすと、扉が音もなく開きました。

「さあ、行きなさい・・・・・・・・何をしていますのですか？」

そう言う死神の視線の先には、ジッと死神の黒い瞳を見つめる少年の姿。

「貴方は・・・先へと進むのではないのですか・・・？」

死神の言葉に、少年は静かに頷きました。

そして、先導する死神の後を追うようにして少年は扉を抜けて行

きました。

扉を抜けた先にあつたのは、病室。

少年が眠り続けている、始まりであり、終わりでもある病室です。

少年は、眠る自分自身を横に座り、見ていました。

その寝顔は何も傷ついておらず、苦悶の表情を浮かべているわけでもありません。

少年はただ、ただ眠っているようでした。

その時、軽いノックがされて影が一つ、病室内へと入ってきました。
た。

部屋の中へと入ってきたのは、あの“友達”でした。

友達は、静かに室内を進んでいき、ベッドの隣にあつた椅子へと

腰掛けます。

そして、何も言わずに眠り続ける少年をジッと見ていました。

少年も見えていました。その“友達”の姿を。

これまでずっと避け続けてきてしまったその姿は、ひどく憐れでした。

友の目は痛々しく充血し、その下には黒い隈が来ています。

そんな“友達”の、口が開きました。

「・・・貴方と最後に話したのはいつ・・・だったけ。正直・・・貴方のあの憎まれ口を聞くことが出来ないなんて信じる事が出来ないの・・・あのね、私は貴方に言わなくちゃいけないことがあるの。このような場でしか言うことが出来ない自分がとても・・・アレですが・・・聞いてくれますか？」

これが、いままでの少年の心のままであったならば、この言葉に耳を傾けることはなかったでしょう。

しかし、長い旅路を終えた少年の心からは、歪んだ哀しみが少年自身も分らないところで他の何かに変わっていきつづけていたのです。

だからこそ少年は、心の思うがままに頷くことが出来たのです。

そして、少年の返事が分かったかのようにして“友達”も頷き、話し始めました。

「私は、謝らなければいけない。あの山の中での出来事を。貴方自身に、そして私を止めることが出来なかった私自身に。そして知ってもらいたい。あの時止めることが出来なかったけれど私のその時の気持ちを」

「貴方が穴の中へと落ちてしまった時、私はパニックになってしまっていたんでしょう。ほら、憶えてる？どこかに行ったりするときも、私は臆病だったからいつも貴方の後ろに隠れてくっついていました。そのせいかどうかは知らないけれど、いざ自分で何かをしなればいけないって時に、それがいつもできなかったんです」

「それでも私は考えました。そして、私の力ではどうすることもできない、貴方を助けることなんてできやしない、そう判断して助けを求めて山を下りて行ったんです」

「だけど、それは間違っていました。その時の私は貴方の、達也の気持ちを考えていなかった。穴の中にいた貴方は、動くことも何もできず、私という存在にしか手を伸ばすことが出来なかった・・・・そんな貴方の手を私はいとも簡単に振り払って去っていったしまった。自分一人だけのうのと安全なところに逃げていき、友達を一人捨ててきてしまった。達也はいつも私のことをまもっていてくれたのに！！！！！！！！！！」

「・・・私が悪いんだ。どれも、これも。そう、私は怖かった。あの山で一夜を過ごすことになるかもしれないということが怖かった。でも、今も私たちを照らし続けているこの黄昏の夕日を見るたびに思い出してしまうんだ、あの日のことを。貴方が無事に発見された時にだって、なんで私は貴方に一言かけてあげることが出来なかったんだろう。たとえば何か言い返されたりしても、そこで全ては

終わる。心の中に棲みついて、悲しみ続ける必要なんてなかったのに。その時に思いを告げることこそが大切だったのに……。もう、聞くことも話すこともできない貴方に対してこんなこと言っちゃって何なんだろうね私って。本当に何なんだろう……。もっと……。もっと達也と一緒にいたかったのに……。ゴメンネ……。ゴメンネ……」

そこまで言い終えると“友達”は、顔をベッドの毛布に沈めて、静かに、静かに泣き始めました。

その姿を、少年は透けた自分の手を通して見ていました。ジッと静かに見つめていました。

「さて少年、そろそろ行くよ」

死神が少年の頭に手を置きながら言いました。見ると、扉はすでに開き終わり、暖かな光を放っていました。

「これで終わりではないんだ。これこそが……。始まりなんだよ……」

その言葉に少年は静かに頷き、もう一度最後にとその姿を見ました。

その時でした。

少年の瞳から一筋の雫が零れ落ち

その口元へと……………

転換、落ちて墜ちて

『・・・この階段は人間の“口”という器官に反応してその全てを呑み込んでしまう。・・・』

『・・・消えてしまうんだ。この世界からも、何からもね。そして、消えた魂は永遠に痛みだけが存在する場所に送られてしまう、と聞いた』

「「・・・！！？」」

変化は突然でした。

周囲が突然暗くなり、床が崩れ始めます。

「・・・！！少年、走るぞ」

死神はそう言って走り出します。少年も必死にそのあとを追いかけます。

しかし、走りながらも少年は気づいていました。床の崩れは、自分の元にしか向かってきていないことに。そして、このままでは彼を巻き込んでしまうことに。

そして少年は歩くことを止めました。止めて崩れゆく床へと身を任せて

「何をしている少年、このままではお前は」

落ちそうになっている少年を必死につかみながら、死神が叫びます。

「なんで、俺なんかにくんなくれるんですか」

死神とは対照的に穏やかな口調で少年が言いました。

「いいから……黙って登ってこい……あ……!!」

そういつた瞬間足元は崩れ、無情にも二人の手は離れていってしまします。

「あつ……た……達也——！！！！！！！！！！」

「……ありがとう……龍太……兄さん……そして……」

・さよな・・・」

そして、少年の落ちた穴は次第に塞がっていきました。

・その穴の横で、影が一つその様子を見つめていました・・・

少年は静かに

静かに闇の中を落ちてゆきます

慌てることも、騒ぐことも無く

その身を委ねたままずっと

あの光に触れることが出来るのなら

俺はいくことができるのだろうか・・・

そして、少年の体が光に触れて・・・包まれて・・・少年
の意識は、消えていきました・・・。

・ ・ ・ ・ ・

• • • • • • • • • •

終わり、そしてこれから

「・・・ふああゝあ・・・あ、あれ？」

達也が目を覚ましたのは、ベッドの中でした。

訳が分からないまま周囲を見渡すと、達也の足元に何やら違和感が・・・。

「zzzz・・・♪」

・・・どうやら“友達”は、気疲れとショックによるねぶそくによってか人の病室で眠ってしまったようです。

達也は少し迷った後、自分の背丈よりも頭一つ分小さな少女の頭に手を置きました。

彼女もまた、自身の罪の意識に悩まされ、苦しみ続けてきたのでしよう。

「ごめんね、お前のことを考えてやらないで。拒絶ばかりしてしまつて。苦しい気持ちでいたのは君も一緒のはずだったのにな」

そんな声は眠りつつける少女には届か・・・か・・・！？

「あ・・・天宮・・・君！？」

「えっ・・・あっ・・・もしかして起きて・・・たっフギヤッ！！」

隣れ達也は突然少女にダイビングされて体勢を崩し、少女共々べ

ツドの中へと飛び込みました。

「天宮君、良かった・・・生きてたの・・・生きてたの!？」

「ちよつ待つて土井さん!!土井友紀さん!!痛いって点滴がずれて痛いっていうか胸、胸がなんか当たって・・・ちよつとやーめて!!!」

達也は、友紀の手から必死に逃れながらとりあえず点滴を外します。

友紀も、渋々達也の上から下りて自分の手で眠るときに倒してしまった椅子へと座りなおしました。

「それよりも・・・天宮君、貴方脳死だから死んだんじゃないの・・・嬉しいけど・・・」

「それなんだけど俺自身も何が何やら・・・」

それでも達也は、自分を落ちつける意味も込めて友紀に説明を始めました。

「ゝてなわけで」

一通り話し終えると、達也はベッドに寝っ転がりながら言いました。

「信じてくれ、なんて甘っちょろいことは言わないよ。ただ、俺がどんな思いでいたかを話したただけだから」

「ううん、私は信じるわ。だつて天宮君の

「ストップ！俺のことをそんな名字なんかで呼ばないでくれよ。呼ぶなら昔みたいに名前で呼んでくれ」

「え、なっなんでかな？そ、それなら私も昔みたいに呼んでほしいな。ちゃんとユキつて女の子っぽい感じで呼んで欲しいな……それよりもなんでいまさらその呼び方に？」

達也の提案に、どきまぎしながらも友紀が答えました。

「え、だつだつて確か友……ユキが小さいころに言ってただろう？『貴方は一人でいても何でも出来る《達》人だけど……私と一緒にいれば、ね、それだけで“友達”になるでしょ』って。だからこれでまた友達……だろ？」

「友達か……ねえ……あつ何でもないよ」

友紀が少し悲しげな顔で呟きました。

「ねえ達也？」

「何だ？」

「そういえば貴方にまだ、バレンタインの贈り物してなかったね」

「・・・ああ、そういえばそうだけど別にいいよ。今更」

「うっん、もらってほしいの。貴方に・・・私の大切な・・・」

「えっ・・・なにおんぐっんー」

何の構えもせず無防備に振り向いた少年の唇に、強引にもう一つの唇が重ねられました。

無理やり達也が引き離すと、そこに映ったのは恍惚とした表情をした友紀の姿。

「な！？何するんだよ！！」

「私からの・・・贈り物です・・・では・・・お返しは結構ですから・・・」

自分から突然始めて突然事を終えた友紀は、素早く席を立ちあがると扉へと向かって歩き出します。

「!!あつちよつと待てよユキ!!」

一方、シヨックから無理やり立ち直った達也は、ベッドから急ぎ飛び降りてフラフラと歩く友紀を抜かして扉を閉ざしました。

「・・・い、いつたい何よ」

「いや、別に。とりあえず好きな女から先に口づけされちゃったっていう事実はなかなか堪えるわけですよ。お前のしたがつていたことは実は俺もやりたかったってことぐらい察してくれよ、そう簡単に言えないんだし」

「っひゃっひゃあゝ・・・」

そう言いながら友紀の腰元に腕をまわして抱き寄せる。

「・・・一日遅れただけホワイトデーのお返しってことでいいよな？」

そして、互いに唇をそつと重なりあわせませす。

それは、先ほど受けた一方的に押し付けるようなものではない、二人が互いに互いを想ったその上での抱擁でした。

まあ、お互い顔を面白いぐらいに赤く染めた状態ではありましたが・

-
-
-
-
-
-

死神が一人、そんな光景を笑いながら見つめていました。

「これがお前の望んだ結末か龍太、いや今は式部であつたか？」

閻魔が、死神の横に座って問いかけました。

「まったく、お前もムチャをする。わざわざまだ死ぬ時期でもない少年を管理局のミスに乗じて記憶の回廊へと連れてくるなんてな。もし、死なせてしまったらどうするつもりだったんだ」

「……あの子があんなになったのは僕のせいなんです。僕が、死ぬことが怖くてこのような立場に立ったことによって、そうやって

突然失った絆を求めていつて失って、弟は、壊れてしまった。だから僕は、それをどうにかしたかった。あのままあの子が苦しみ続けるくらいなら、いつそのこと自身の手で楽にしてあげたかった」

「・・・はい、これはエゴです。僕の勝手なエゴでしかありません。ですが、貴女のような上司にも恵まれて、あの子は無事に自分を取り戻すことが出来ました。・・・や、止めて下さい、棒で叩くのやめてください。痛いですから、痛いってやゝめゝて」

死神は、必死で防ぎながら話を続けます。

「自分としては、あの子が僕のことを思い出してくれて、庇ってくださるところまでしてくれたことだけで十分なんです。それに、こんなものまで残してくれましたし」

「これは？」

「これは、家族の写真です。本来なら、存在を失った僕は写ることはないんですが」

「えっあつう、写ってる!？」

「はい、どうやら弟が僕のことを想ってくれているそのあいだけ存在が復旧するようです。僕にとってこの姿は罪であり、罰であり、懺悔でもあります。それでも、この写真に写ることが出来るその間だけは、僕は一人の兄になれるんです」

「・・・うつけ者が・・・・・・・・」

閻魔が笑いながら言いました。

「どうも、こんな弟バカが部下ですみません」

そう笑いながら言って死神は、卒業証書を手に笑いながら帰る少年の姿を穏やかな表情で眺めていました。

FIN

あとがきにかえまして

この小説を読んでくれてありがとうございました。

至らぬこともあったと思いますが、こうして最後まで読んでくださったこと本当に感謝いたします。

最初の方でも述べたかもしれませんが、この話の元となる話は自分が中学生の頃に作った作品を思い返しながら書き綴ったものです。

原作は手元にはないのでストーリーが変わってしまったところもありますが、まあ良いとしましょう。

正直に言っただけかなりベタベタな展開になってしまいました。その点やらその他もろもろ精進したいと思います……。

多分皆さんにも周りから離れてみたい、一人でいたい、そんな思いになったことがあるかもしれません。作者もよくそう思います。

でも、そう思っているだけではだめなんだと思います。

一人でいたいと思ってもやっぱり生きる上でどうあがいても一人で生きることできません。

作者もまだまだ人生生きてきて短いですが、それでもそんな風には思います。それぐらいはいやでも分かります。だからそんなイメージでこの作品は書いてみました。

人の想いを、声を無視してはいけないんだと思います。それはその人の存在を否定すると同じ事……すみません偉そうに……。

自分のグツと来た言葉に『一人でいるのと、独りになっちまうのはやっぱり違うよな』というのがあります。

・・・はい、その通りだと思います・・・。

なんだか小説自体が暗くなっではしまいましたがこれでこの物語は
終わりしたいと思います。

本当に今までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0353g/>

君に伝えたい一言

2010年10月15日19時26分発行